姶良歴史ボランティア協会広報誌　第19号　　発行日：平成25年6月13日（木）

あいらの歴史と物語

発行責任者：姶良歴史ボランティア協会
会　長　橋木　雅晴
編　集　者：広報部　松下　澄行

連絡先：〒899-5421　鹿児島県姶良市東餅田498　姶良市歴史民俗資料館　TEL0995(65)1553

よみがえる古代の姶良

姶良市教育委員会文化財係
主任主査　深野　信之

別府川河口から約5kmさかのぼった中流域に位置する姶良市船津・春花地区では県営ほ場整備工事に伴い、平成17年度に遺跡分布調査が行われました。その結果、船津地区に1遺跡（袴田遺跡）、春花地区に3遺跡（柳ガ迫、城ヶ崎、外園遺跡）が確認されました。このうち、袴田遺跡は計画を変更して地中に保存できましたが、柳ガ迫、城ヶ崎、外園遺跡は工事による消滅が免れないため、平成18～20年度に全面発掘調査を実施しました。

城ヶ崎、柳ガ迫、外園遺跡は奈良～平安時代を中心とする遺跡群です。遺跡の性格は城ヶ崎遺跡が駅路（道路）、柳ガ迫遺跡が役所、外園遺跡が集落・工房と三者三様です。ぞれぞれが相互に関係しながら存在していたことが分かりました。

［城ヶ崎遺跡］

城ヶ崎遺跡にあたる幅6～8mの帯状の水田は、以前から歴史地理学者や古代道路研究者から古代官道（駅路）である可能性が指摘されてきました。また、平安時代（10世紀）に成立した『延喜式』の記載から、薩摩国府（薩摩川内市）と大隅国府（霧島市）を結ぶ駅路の一部で、付近には蒲生駅があったことが推定できます。

古代の道路遺構は現在の市道に沿う形で検出されました〔写真〕。道幅は4～5mで、1度改修されています。他地域の官道（駅路）の道幅11～12mに比べると規模が小さい特徴があります。路面は粘土と砂を混ぜた土壌を硬く締めて造られています。その中央部には、繰り返し通行したために生じた溝状の凹みが2条走ります。

遺構や遺物の検討から、この道路遺構は8世紀頃には造られ、9世紀前半頃に改修されました。11～12世紀前半代には官道としての役目を終えたようです。

［柳ガ迫遺跡］

柳ガ迫遺跡は8～10世紀に営まれた遺跡で、遺構の規模や遺物の質・量から考えて、一般集落ではなく、古代の役所跡である可能性が高い遺跡です。識字層の存在を示すヘラ書き土器や、高級品

大宰府へ続く推定古代駅路（城ヶ崎遺跡）

である中国産陶磁器、役人がベルトに付けた石製腰帯具は一般集落では出土しない特殊な遺物です。

柳ガ迫遺跡が想定される古代の役所は、『延喜式』に記載された「蒲生駅」が現段階での第一候補ですが、遺物の質からは桑原郡を管轄する役所である「桑原郡家」の可能性も考えられます。

［外園遺跡］

外園遺跡は8世紀後半から16世紀まで長期間営まれた遺跡で、5000基を超える土坑・柱穴が検出されました。古代には役所（柳ガ迫遺跡）に付属する工房・集落、中世には別府川と幹線道路を利用した流通拠点として繁栄していたようです。

中世にこの地を領有し、勢力を伸張した蒲生氏や平山氏との関係がうかがえる遺跡といえます。

この他にも姶良市域では奈良・平安時代の遺跡が多く、この地域（桑原郡西部）が大隅国内において重要な位置づけをもっていたことが推測できますので、古代の探求はまだまだ続きます。

史跡紹介

重富地区

岩剣神社内の山の神と鹿の供養塔

藤　崎　幸　雄

狩人たちは、鹿や猪は山の神が授けてくれる物だという信仰が強いです。獲物を授かると、神前に供え祭りを行い、山の神に感謝します。また獲った獲物の供養のために石の祠を建て山の神としてまつりました。これらの儀式は山の神の祟りを恐れたからです。

岩剣神社境内には５基の石碑などがあります。写真①は鹿の供養塔です。正面には「□奉供養志願□」、左側面には「廻向文」（用語解説参照）、右側面には「□鹿五十三臨時成殺蒙・・・」とあります。これらの文面より察するに、多くの鹿を殺生しなければならなかった事情と思われ、その供養のために碑を建立したものと考えられます。

建立者は越前（重富）島津家17代当主忠救です。（寛政8年・1796年建立）

通常の鹿狩りではなく、鹿の病気の発生を防ぐとか、繁殖しすぎて農作物の被害を防ぐとかで、駆除したのではないだろうか。この供養塔はまさに山の神の祟りが畏怖されていたことを物語っていると思います。

触田の田の神

西　田　　實

触田下の稲留神社社殿の右側に、田の神が鎮座しています。石像の高さは 93cm。かたわらの石碑には、「元文二天（年）巳（1737）御田之神十月十八日」と銘が刻まれています。よく見ると割れた傷跡や欠損した部分があります。それは高速自動車道建設の折、稲留神社とともに現在地へ移されたときのものです。

説明板に、「この像は所作や表情の豊かさでは県下でも有名な田の神です。頭に大きなシキ（蒸し器の道具）をかぶり、右手にメシゲ（しゃもじ）をかかげ、左手にお腕を持った神主の姿をしています。メシゲと顔は赤く塗られ、翻った袂の表現には躍動感がみなぎっています。タスキ掛け姿は田の神舞いの場面と考えられます。この福々しいユーモラスな顔立ちは神舞いの面を写したものと推測されます。」とあります。

東佐多町東下の田の神と同様、石工前田喜八作と思われています。

触田の井堰（中溝）

吉　田　茂　子

中溝の転倒堰

県道重富蒲生線を北上し重富と吉田の境に触田の井堰あります。この井堰は万治元年（1658）頃、19代島津光久が藩財政のもとになる米の生産高を上げるため新田の開発を命じました。

当時の餅田村では、思川・別府川の両河川の砂がいくえにもなってできた土地であり、水位が低くて水路を設ける事ができず長年畑作農業でした。

畑地を水田にするため、水源を思川上流にもとめ水を引き、５年の歳月をかけて井堰や用水路が完成しました。用水路総延長約11km（開発面積約330町歩）。

重富・帖佐の土地に水が送られて、水田が広がり潤いをもたらしました。

当時としては大規模な難工事だったのでしょう。長い歴史の中には、暴風雨による堤防の決壊、その惨状・規模、復旧工事など主だった記録が石碑にしるされています。

岩をえぐった穴の中には、水神・地神・山神がまつられています。これらの三柱の神々は地域の人々の願い（水の確保・豊作など）を温かいまなざしで見守っているようです。

歩き・み・ふれる歴史の道白銀坂

平成25年5月11日（土）

脇　元　浜

竹之下　洲一

『三国名勝図会』に脇元浦浜は、「風景稍佳なり、此濱に本府往来の舟舶ある故に、近邑の人民も此濱より発する者多し。」とあるように、古くから鹿児島と結ぶ重要な港として、多くの人々の行き来がありました。

天文 23 年(1554)岩剣城合戦の時には、島津忠将の軍が 50 そうの船に分乗して脇元に押寄せ、鉄砲を発射して城兵と争いました。

恵比須神

天正 20 年（1592）家老町田久倍（ひさます）は、竜ヶ水で害した歳久の首を脇元まで運び、近くの井戸で清めて届けたことで義久に届けうです。「日本全図」を作成した伊能忠敬は、文化 7 年(1810)と文化 9 年(1812)加治木から海岸線を測量し、脇元浦町に宿泊しています。

江戸時代の儒学者頼山陽は、旅の途中、文政元年(1818)鹿児島を船出し、友人に脇元まで送られ別れを惜しんだそうです。

文久 3 年(1863)脇元浜沖に避難していた藩の汽船三艘が、英艦隊に拿捕されたことをきっかけに薩英戦争が始まりました。

昨年重富海岸は、霧島錦江湾国立公園に指定され、多くの関心を呼んでいます。重富漁港の「恵比寿様」は、これらの推移を眺めながらほほえんでおられるようです。

島津歳久の生涯

佐土原　保子

島津歳久は、父15代島津貴久、母入来院重聡の女子（雪窓夫人）の三男として、天文6年（1537）7月10日伊作亀丸城で生まれました。兄は義久・義弘で、弟は家久であり、いずれも文武兼備の武将と称され、歳久は「知恵深く智計に並ぶ者なし」と讃えられています。歳久は18歳で、岩剣城の合戦に早くも名を上げ、島津氏の三州統一、九州制覇にでも大きな軍功を挙げました。

天正15年（1587）関白秀吉の九州の役には最後まで屈せず、後々遺恨を生じ、遂に秀吉の勘気に触れることになりました。

文禄元年（1592）秀吉は、義久に「歳久の首を差し出せ、従わねば歳久の領地近郷の者たちは撫で斬りする」と厳命しました。そして兄が弟に兵を差し向け自刃を迫るという悲劇がおこりました。「太守に対し矢を放つに非ず、君臣の本命をもって暫時の戦を励むもの也」の名言を残し、文禄元年（1592）7月18日竜ヶ水で自刃されました。御年56歳、殉死者27名でした。

「晴蓑（せいさ）めが、魂（たま）のありかたを人問はば
　　いざ白雲の　末も知られず」

という辞世の句を残しています。

ＪＴの森　重富

恒吉　一洋

説明を受ける参加者

「JT の森 重富」は、平成 20 年（2008）に JT（たばこ産業株式会社）が開設した総延長約 1.1 kmの山岳遊歩道です。植林や間伐など森林保護活動を続けている JT が白銀坂の散策を楽しむ人々のために、「さくら見晴台」を開設しました。そこからは、錦江湾と桜島を眺めることができます。「JT の森 重富」を含め白銀坂周辺の森には、クス、スギ、アオキ、ツワ、ミツバ、シャガ、モウソウチクなどが見られ、それが適当に日光を遮る山岳遊歩道となっています。今回は鹿児島市に近くて坂の短い「くすのき坂」（約 400m）から登り、「さくら見晴台」（標高 332m）で昼食をとり、「たてぼり坂」（約 700m）を下るというコースをとりました、眼下に広がる錦江湾と美しい桜島を見ることができて、とても感動しました。参加者全員が無事に踏破でき充実した一日となりました。

姶良市歴史資料館展示品紹介

帖佐松原塩田の模型と写真

吉田　茂子

かつて旧帖佐村の財政を潤し、他市町村からうらやましがられた松原塩田は、昭和26年のルース台風の甚大な被害にあい、70年続いた製塩業は幕を閉じました。

その塩田の模型と写真が、姶良市歴史民俗資料館に展示され、往時の様子を再現しています。

砂をまいた塩田に海水を吸い込ませ、太陽の熱と風の力で水分を蒸発させると砂に多くの塩分が付着します。その砂を海水で洗い流すと、より塩分の濃い海水が得られます。この製法を「入浜式塩田」といい、働く人も配置した模型です。

写真には、塩を炊く大きな煙突、その遥か右側の鳥居が塩釜神社です。現在は公園化され、その一角に塩田の記念碑があり、塩田の歴史が詳しくつづられています。

平成24年度ボランティアガイド報告

① 3／7　鹿児島エッセー研究会（9名）
「姶良の三坂と山城をたずねて」

② 3／25　蒲生生活学級（女性グループ）
「重富地区の史跡巡り」（26名）

編集後記

平成25年度は、企画、広報、研修の３部の活動を再検討・分担し、新陣容でスタートしました。

多くの皆様に喜ばれる史跡ガイド活動の充実に努めてまいりたいと考えます。

次号は、甲突川流域・川薩方面の史跡紹介等を予定しています。

姶良歴史ボランティア協会々員紹介

姶良歴史ボランティア協会　平成25年1月17日（木）

会　長	橘木　雅晴	
副会長	松元　淳一	
書　記	恒吉　一洋	
会　計	吉田　茂子	
企画部 ◎	竹之内和仁	橘木　雅晴
	藤崎　幸雄	濱口　純則
	佐土原保子	
研修部 ◎	恒吉　一洋	竹之下洲一
	恒見　勝則	吉田　茂子
広報部 ◎	松元　淳一	西田　實
	坂元　清美	松下　澄行

歴史用語解説

廻向文（えこうもん）

法会の終わりに、その功徳を自他の成仏や往生・死者の成仏などにめぐらし向ける意を表すために読誦するもの・回向偈（えこうげ）。

姶郷（あいきょう）

「上溝（うわみぞ）と下溝（したみぞ）（中溝）」

恒吉　一洋

旧姶良町には、上溝・下溝と呼ばれる２つの灌漑用水路があります。

上溝は戦国期の開削とされ、中溝は江戸前期に開かれています。

いずれも総延長は約11㎞です。

上溝はトンネル工事、下溝は取水地から排水地までの高低差などの解消に大変な難儀苦労があったということです。

先人の先見の明により、今日の豊かさがあることを決して忘れてはならないと思います。